

民衆本『狐ライナールト』（H1564）について

檜 枝 陽 一 郎

0. 序

狐のライナールトを主人公とする一連の動物譚が、盛んに印刷されて出版されたのは15世紀後半のことであった。当時発明されたばかりの、しかし瞬く間にヨーロッパ全土に普及した印刷術を土台にして、多くの印刷業者が各地で職業としての印刷業を確立し、自らが印刷して刊行する本の題材をあらゆる分野から集めていた時代である。印刷業者であったヘラルト・レーウはオランダのゴータにおいて、当時すでに写本として存在した韻文の『ライナールト物語』を散文に改編して、1479年に『狐ライナールト物語』（研究史上の略号はPg.、Prosa Goudaの略）として刊行した。この作品は低地諸州において最初期に印刷された散文小説の一つと言われており¹⁾、狐ライナールトを中心にして騒動が繰り返られる物語がいかにかに当時人気を博していたかが窺われる。

『狐ライナールト物語』では、先行する『ライナールト物語』にはなかった目次と章見出しが設けられ、読者が購入に際して一目で本の内容を理解できるように配慮されている。こうした本の体裁の変化は、本を購入するかも知れない不特定多数の潜在的読者に合わせたもので、貴族などの個人が本の制作を依頼していた写本の時代とはまったく違う。新時代の到来と言えるだろう。その後レーウは1484年に、当時ヨーロッパ最大の商業都市であったアントヴェルペンに転居して事業を継続した。レーウはさらにアントヴェルペンで1487年から1490年にかけて、『ライナールト物語』に章見出しおよび教訓、挿絵を盛り込んだ韻文作品を刊行した。この作品は残念ながら7葉のみ、およそ221行しか残っていない²⁾。現在イギリスのケンブリッジ大学図書館の所蔵となっているので、ケンブリッジ断片あるいは発見者の名をとってクレマン断片とも称される。断片であるとはいえ、この作品はライナールトをめぐる作品群の研究にとってきわめて重要である。一つは、ライナールトの作品群ではじめて教訓と挿絵が盛り込まれ、とくに挿絵はその後の作品群に見られる挿絵に大きな影響を及ぼした点、第二にドイツのリュベックで1498年に刊行された中世低地ドイツ語による『狐ラインケ』³⁾の直接の典拠となっている点であり、ケンブリッジ断片によってはじめてオランダとドイツを結ぶ一筋の繋がりが明らかとなった。ケンブリッジ断片の章見出しと教訓それに序は、1564年にアントヴェルペンで刊行された民衆本『狐ライナールト』に深く関係している。

15世紀後半に確認できる、ライナールトをめぐるこうした旺盛な出版活動も16世紀に入ると下火になってしまう。イギリスの印刷業者キャクストンが『狐ライナールト物語』を英訳した『狐レイナード物語』が16世紀前半に再版されたことを除けば、この時期、ライナールトを主人公とする作品は低地諸州では確認されていない。一定の作品が存在したものの散逸して現存せず、それゆえ空白期間が生じているのかもしれない。いずれにしても、われわれが確認できる次の作品は1564年に刊行された『狐ライナールト』（研究上の略称はH1564という）であって、研究史上では民衆本（蘭語volksboek）と定義されている⁴⁾。この『狐ライナールト』が前述した先行作品群とどのような関係にあるのか、その独自の特徴とはどんなものかを考察するのが本論の目的である。

1. 成立の経緯

現在ドイツのフライブルク大学図書館に所蔵されている民衆本『狐ライナールト』の扉には、日本語にしてこう記載されている。

狐ライナールト

とても楽しくて
気晴らしになる
物語、教訓と短い
解説つき

また、同じ扉の下には、『狐ライナールト』の販売者の名前と、それがどこで購入できるかを示す書店の住所が載っている。

アントヴェルペンのペーター・ファン・ケールベルヘンのもとで販売中
住所はグルデン・クライス内⁵⁾の聖母教会墓地となり⁶⁾

表題の一部をゴチック体で表したのは、その書体がそれ以外のものとは異なることを明示するためである。ゴチック体の部分は、後述するように当時新しく設計されたシヴィリテタイプ (Civilité typ) の書体で組まれており、それ以外はローマン体の表記であることを示す。書体の大きさが異なるので、それに応じて上の訳文でも書体の大きさを変えた。巻末 (explicit) には、やはりシヴィリテタイプの書体で中央揃えで「われらが主の年一五六四年にアントヴェルペンにて印刷された。」とある。

表題に続けて記された「とても楽しくて気晴らしになる物語」という説明は、本の購入を促すために、当時しばしば宣伝されたもっともポピュラーな謳い文句であった。「とても楽しくて気晴らしになる」とは、退屈をしのぐため、また憂鬱を退散させるために有効であるとの宣伝に他ならない。さらに「短い解説つき」との付記があるが、この「短い」という形容詞にも「真実の」とか「楽しい」といった意味が含まれている⁷⁾。16世紀の人々が、扉を一目見てすぐに『狐ライナールト』がどんな類の本であるのかをイメージできるように、仕掛けが施されていると言ってよい。ただ、実際に本文を読んでみても解説は見当たらない。たとえば前述した『狐ラインケ』には、第一の序に「私は本書を四部に分け、各章の正しい意味を理解すべく、各章にこの詩人の簡単な解釈や意見を添えた。」とあり⁸⁾、実際に本文に続けて「この二つの章で詩人は五つのことを教える。」(第一之書二〇章)などの文言の後に解説が添えられている⁹⁾。それに対して『狐ライナールト』では、扉に明記されているにもかかわらず、この類の解説が確認できない。せいぜい本文の解説らしきものと考えられるのは、第17章の教訓「鐘を引っぱろうとした狼のように、誰しも自分の役目でないことをあえてするには及びません。また欲張りな宮廷人に対して、簡単には脱出できないような窮地に陥らないように、あまり蓄財に走るべきではないというのがこの章の教えです。」といったものや¹⁰⁾、第35章の教訓にある「悪人と付き合うと、災難以外なにも生まれません。キワールトでよくわかる通り

です。」というもので¹¹⁾、解説が教訓の中に組み込まれてしまった。『狐ラインケ』との比較によって、本来存在したであろう解説が省略されたと考えるのが相応しい。

扉の下にある記述から、販売者がアントヴェルペンのペーター・ファン・ケールベルヘンという人物で、巻末からは、『狐ライナールト』が同地で1564年に印刷されたのが判明する。ケールベルヘンは、オランダおよびベルギーにおける400年間にわたる印刷業を論じたカタログにその名前が記載されておらず、印刷業者というよりむしろ書籍商であった¹²⁾。実際にこの作品を印刷したのは、アントヴェルペンの最も著名な印刷業者クリストッフェル・プランティンであったことが、プランティン印刷所の帳簿から明らかになった。帳簿を見ると、ケールベルヘンがすでに1563年に『狐ライナールト』および『12氏族長の契約 De Testamenten der XII Patriarchen』の二冊の印刷依頼をプランティンにしていることがわかる。1563年12月12日の帳簿に確認される項目とその内容は以下の通りである¹³⁾。

「『12氏族長の契約』、8折判でペーター・ファン・ケールベルヘン用

12月12日

『契約』の残りの組み版と印刷および『狐ライナールト』の作業開始 1フローリン8スターリング¹⁴⁾
(Pour composition et impression du reste desd. Test, et commencement de Reynard de Vos: 1fl. 8st.)

『狐ライナールト』、ペーター・ファン・ケールベルヘンによる公刊用

12月19日

組み版と印刷 6フローリン18スターリング (pour composition et impression 6fl. 18st.)」

印刷のための総費用は1564年の2月29日に計算され、ケールベルヘンは同日、一部を前払いしていた額を差し引いた残額を支払っている¹⁵⁾。結論として、民衆本『狐ライナールト』というのは、ケールベルヘンがプランティンに印刷を依頼して制作させ、それを1564年に自分の書店で販売したものである。ただし、いったいだれが『狐ライナールト』の元原稿を制作したのかはわからない。ケールベルヘンであったのか、あるいは未知の編集者なのか、あるいはケールベルヘンが、すでに存在していたと一部の研究者から想定されている『狐ライナールト』の初版本ないし異本を印刷所に持ち込んだのか判然としない¹⁶⁾。いずれにしても、1564年以前に初版本ないし異本がすでに存在したかどうかは、本論の内容とは直接関連しないので、本論でこれ以上言及することはない。

『狐ライナールト』の印刷本としての特徴は、表題の一部である「狐ライナールト／とても楽しくて／気晴らしになる」の部分と本文における教訓がローマン体で印刷されている一方、その他はすべてシヴィリテタイプ (Civilité typ) の書体で組まれていることである。この書体はフランス人ロバール・グラニョン Robert Granjon がリヨンで設計したもので、16世紀にフランスで通用していた、斜め書きでやや長く、並び線よりも下に延びた逆向きに反り返った r を特徴とする筆写体 (カーシブ cursive) の手跡を模したものであった。この手跡は14世紀後半のフランスの文献にはじめて登場し、語から次の語を書くときのペンの走りをよくして、スムーズで書きやすい書体であった。主として通信文や手記、また入念に作られたのではない類の書籍に用いられた手跡であったという¹⁷⁾。グラニョンがこのカーシブ書体を模した活字をフランス書体 (lettre française) と名づけ、その後フランスの活字鑄造業者もそう呼び¹⁸⁾、シヴィリテタイプと呼ばれるようになったのはようやく19世紀初頭からだという¹⁹⁾。この書体を用いたグラニョンによる最初の本は、イノツェンチオ・リンギ

エリ Innocenzio Ringhieri による、ジャン・ルヴォ Jean Louveau が仏訳した『生と死の対話 *Dialogue de la vie et de la mort*』であった。その後早くもアントヴェルペンのプランティンは、1558年のうちにグラニオンからこの活字を購入して、それによる最初の本となった『児童のための ABC あるいはキリスト教教育 *L'ABC ou instruction chrestienne pour les petits enfants*』を出版している²⁰⁾。そうした経緯があって、プランティンは『狐ライナールト』の印刷に際してもこの書体を使用したのである。ケールベルヘンがその際この書体の使用を指示したのかどうか判然としないものの、後述するようにその公算は大だと思われる。

2. 本の体裁の比較

	目次	序	章見出し	教訓	挿絵
『狐ライナールト物語』 1479年	○	○	○	-	-
ケンブリッジ断片 1487～1490年	?	?	○	○	○
『狐ラインケ』 1498年	○ (本文末)	○	○	○	○
『狐ライナールト』 1564年	○	○	○	○	-

各版を時系列に沿って配置したのち、それぞれの本の内容構成を表にしたのが上図である。『狐ライナールト物語』に特徴的なのは、教訓と挿絵が欠落していることで、それらはライナールトの系譜においてはケンブリッジ断片が初出である。ケンブリッジ断片の目次および序は残存しておらず、それらが記載されていたかは確認できない。しかしながら、『狐ラインケ』の序がケンブリッジ断片に由来することはほぼ確実であるので²¹⁾、ケンブリッジ断片にも同様の序があったと推定できるだろう。他方、『狐ラインケ』の目次は本文末に位置しており、それは「まずは第一之書で三十九章から成る。」といった簡単なもので²²⁾、その他の各版に見られる、章見出しをほとんどそのまま記載した、本文よりも前に置かれた目次とは異なる。ケンブリッジ断片では本文の末尾がやはり残っておらず、目次がどこにあったのかはわからない。

各版の内容上の系譜からいえば、ケンブリッジ断片は『狐ラインケ』の直接の先駆けと見なせるだろう。『狐ライナールト』は、本文については同じく散文である『狐ライナールト物語』を踏襲しながら、他方で序および章見出し、教訓についてはケンブリッジ断片に負っていることが特徴的である²³⁾。たとえば章見出しに関して、ケンブリッジ断片の末尾にある第24章にはこう記載されている。

「王様が審理をして、ライナールトを逮捕して首吊りにすべしと判決を下した次第。第24章。Hoe die coninck te recht sittet ende gheeft die sentencie datmen reynaert vanghen soude ende byder kelen hanghen Dat .xxiiiij. capittel」²⁴⁾

他方、『狐ライナールト』第23章の章見出しは以下の通りである。

「王様がライナールトを逮捕して木に吊って絞首にすべしと判決を下す。De Coninck gheeft de sententie datmen Reynaert gheuanghen neme, ende dat hy ghehanghen worde aen eenen boom. Dat xxij. Capittel.」²⁵⁾

二つの章見出しを比較すると、小さな異同はあるものの、両者が互いに関連していることが明白である。ただし『狐ラインケ』の該当する章見出しはかなり異なっており、『狐ラインケ』の作者による改変だと窺わせる。

「重大な件でラインケはあまたの敵に訴えられたこと、めいめいに申し開きしたが、ついに証人によって打ち負かされ、死刑の判決をうけたこと 第20章²⁶⁾ Wo Reynke van velen synen wedderparten vorklaget wart in swaren saken; wo he yslykem antwoord gaff, doch int leste myt tughen ouerwunnen wart vnde to deme dode vorordelt. Dat xx capyttel.」²⁷⁾

教訓についても、『狐ライナールト』には40の教訓が記載されており、それらがケンブリッジ断片ないし『狐ラインケ』の系譜に由来することは、つぎの比較から明らかであろう。ケンブリッジ断片の冒頭にはつぎの教訓が部分的に残っている。ライナールトが狼のイセグリムをある貯蔵室に連れて行って、狼はそこでベーコンをたらふく食べて、入ってきた同じ穴からふたたび戻ってこれなくなり、家の主人から手酷く扱われて痛打された。その場面を受けての教訓である。

「ケンブリッジ断片」

「…ここでは欲張りな宮廷人に対して、ここで狼によって示された通り、ふたたび脱出できないような穴に入らないようにあまり蓄財に走るべきではないと教えています。というのも、腹一杯食べたので、忍び込んだ穴からふたたび出て来られなくなったからです。さらにここでは、悪党が殿方や女性を騙すことが示されています。…wert alhier den ghierighen houelinck gheleert dat hij soe vele niet rapen en sal dat hi mids dien niet en come in soedanighen gate daer hij niet weder wt comen en kan twelck alhier oeck byden wolf beteykent wert want hij sinen buyck soe vol ghegheten hadde dat hij niet weder wt den gate ghecomen en konde aldaer hij in ghecropen was. Hier wert oeck ghetheent dat die schalcken bedrieghen heeren ende vrouwen.」²⁸⁾

これに対応すると思われる教訓が『狐ライナールト』第17章にある。「鐘を引っぱろうとした狼のように、誰も自分の役目でないことをあえてするには及びません。また欲張りな宮廷人に対して、簡単には脱出できないような窮地に陥らないように、あまり蓄財に走るべきではないというのがこの章の教えです。Niemant en behoort hem tondervvinden te doene, tghene dat sijn officie niet en is: gelijk de Wolf die de clocken vvilde trecken. Ooc vvort hier den ghierigen houelinck gheleert, dat hy niet soo veel en rape, dat hijer door in een alsulcken last en come, daermen niet lichtelijck vvt gheraken en can.」²⁹⁾

両者を比較すると、欲張りな宮廷人に対する戒めが共通している。ケンブリッジ断片にある第二の教訓、すなわち「さらにここでは、悪党が殿方や女性を騙すことが示されています。」が『狐ライ

ナールト』には欠落しているものの、『狐ライナールト』の続く第26章の教訓に「悪党は、善意があるかのように装いながら、しばしば君主たちを欺き、道を誤らせます。また君主を籠絡するのに、金銀の話を聞かせる以上に有効な手段はありません。」とあり、別の場所に移動させられたか、別の教訓と一体化されたのであろう。いずれにしても、二つの原文を比較すると、使用されている単語はほとんど同じである。

『狐ラインケ』の教訓と『狐ライナールト』の教訓の間にも一定の類似性がある。すでに Prien は両者を比較して、『狐ライナールト』に40個を数える教訓のうち、14個は『狐ラインケ』に対応物が無いものの、その他の26個の教訓は意味的に『狐ラインケ』にある教訓と比較できるものであり、そのうちの8個は部分的に逐次一致していると指摘し、8例をあげている³⁰⁾。その中でもっとも際立った一致を見せるのは、『狐ラインケ』第一巻四章における教訓の一部と、『狐ライナールト』第5章の教訓の内容である。

「第二に誰も敵の言い分をとことんまで信用すべきではない。ここでラインケがしたように、敵が彼に安全だといろいろ保障し言ったとしても、それのみか聖職者に見せかけ、その衣服をまとめてやって来たとしても。第三に悪人たちのことがここで指摘される。血を流すことを好む人殺しや強盗や剣士が齒を血だらけに染めた時、つまり彼らが悪いことをしたい気になる度に、彼らの改心はめったに、ないしはまったく期待してはならぬことは、本書で詐欺師の偽り者の狐について語られている通りである³¹⁾。To dem anderen male, dat nemant sineme viende loven schal to grunde, al isset ok so, dat he eme vele wissenheit wiset efte secht, gelik hir Reinke dede; ja, al isset ok so, dat he kumpt under eineme schine unde klede der geistlicheit efte hillicheit. To deme dridden male wert hir bewiset van den quaden, dat so wannêr ein morder, ein rover, ein vechter, de gerne blôt vorgeten, so wannêr ere tene sint blodich geworden, dat is, wannêr se hebben genochte efte en wol smekt quât to dôn, dat seldom efte nummer men beteringe van den derf vormoden, gelik hir is gesecht van deme bedrêchliken valschen vosse.」³²⁾

「どんなにめかし込んでやって来たとしても、敵を信じてはいけません。また、祭服や厳かな身なりでやって来て、自分の神聖さを自慢げに語る人々を信用してはいけません。詐欺師の何物でもないからです。他方、盗人あるいは殺人者がその齒を血染めにしたなら、すなわちそこに快感を見出したならば、改悔させる望みはあまり大きくありません。Men behoort gheen en viant te ghelooouen, in hoe schoonen schijnsel dat hy coemt. Men en sal oock gheen lieden betrouvven die in heylicheit cleederen, oft onder tdecsel van heylicheit comen, sprekende, ende hen beroemende van hen heylicheit, vvant daer niet dan bedroch in ghelegen en is. Ten anderen so vvanneer een dief oft moorder sijn tanden bebloet heeft, dat is te segghen, als hy daer sijn ghenuechte in ghenomen heeft, soo en isser gheen groote hope van beteringhe in ghelegghen.」³³⁾

著しく一致しているのは、「聖職者に見せかけ、その衣服をまとめてやって来たとしても (under eineme schine unde klede der geistlicheit efte hillicheit)」あるいは「祭服や厳かな身なりでやって来て (in heylicheit cleederen, oft onder tdecsel van heilicheit)」いるにしても、敵を信じてはいけないことである。また、「血を流すことを好む人殺しや強盗や剣士が齒を血だらけに染めた時 (so wannêr ein

morder, ein rover, ein vechter, de gerne blôt vorgeten, so wannêr ere tene sint blodich geworden)」あるいは「盗人あるいは殺人者がその齒を血染めにしたなら (so vvanneer een dief oft moorder sijn tanden bebloet heeft,)」、「つまり彼らが悪いことをしたい気になる度に (dat is, wannêr se hebben genochte efte en wol smekt quât to dôn,)」³⁴⁾あるいは「すなわちそこに快感を見出したならば (dat is te segghen, als hy daer sijn ghenuechte in ghenomen heeft,)」、「彼らの改心はめったに、ないしはまったく期待してはならぬこと (dat seldom efte nummer men beteringe van den derf vormoden)」あるいは「改悔させる望みはあまり大きくありません (soo en isser gheen groote hope van beteringhe in gheleghen.)」とある。こう比較してみると、教訓の主旨がまったく同一で、中世低地ドイツ語と中世オランダ語の違いがあるにせよ、使用されている単語もほぼ同じ単語であるのが分かる。

以上見たように、『狐ライナールト』は章見出し、教訓に関しては韻文のケンブリッジ断片ならびに『狐ラインケ』に繋がるものである。それでは、本文が『狐ライナールト物語』とどう関連するのかを次章で考察したい。

3. 内容の比較

『狐ライナールト』は、前作の『狐ライナールト物語』に比べて大幅に簡素化されている。その分量を見ると、日本語訳で前作の52%程度を占めるにすぎず³⁵⁾、様々な省略がなされた結果、ほぼ半分の分量になってしまった。本来『狐ライナールト物語』では、物語の中心は動物世界であるものの、時に動物たちと人間とのやり取りが描かれ、いわば人間界に接するようにして動物世界が描かれている。この二重の、動物世界が人間界と接点をもちながら、動物たちがあたかも人間のように振る舞うという物語設定が物語の特徴であると言ってよい。そうしたなか省略がどのような性質のものなのかを論じたい。

3.1. 物語の舞台の限定

動物たちが様々な騒動を繰り広げる舞台は明らかにアントヴェルペンを中心とする地域に限定された。『狐ライナールト物語』の冒頭では、雄鶏のカンテクレールが死んだ娘のコッペを担架に担いで王様の御前にやって来て、担架の両側には悲しげな二羽の雄鶏が付き添っていたという。二羽は「ホラントからアルデンヌにかけて見ることのできるうちで最も綺麗な二羽の雄鶏であった。」とある³⁶⁾。アルデンヌは、フランス北部のアルデンヌ県およびベルギー、ルクセンブルクにまたがる高地を指す。他方、『狐ライナールト』になると、この二羽の雄鶏は「アントヴェルペンからローマにかけて見ることのできたうちで最も綺麗な雄鶏」であったと変更された³⁷⁾。同様に、熊のブルーンがいかにか自分が蜂蜜に目がないことを自慢する場面では「ここからポルトガルまでにある蜂蜜を全部手に入れたとしても、そっくり完食してしまうぞ。」³⁸⁾とあるのに対して、『狐ライナールト』では「アントヴェルペンからポルトガルまでにある蜂蜜を全部手に入れたとしても、一人でそっくり完食してしまうぞ。」となり³⁹⁾、物語の舞台がアントヴェルペンに変わった。

そもそも『狐ライナールト』に挙げられた地名は、架空の修道院の名前であるクワートバスティーア（「悪の統治」ないし「悪の支配」の意）を入れて10を数えるのみで、『狐ライナールト物語』の37に対して大幅に減少した⁴⁰⁾。そのうえアントヴェルペンはポルトガルのアレガルベとともに、『狐ラ

イナールト』で新たに登場した地名である。『狐ライナールト物語』で言挙げされていたヘントやハイフテ、フルステルローなど、アントヴェルペンより西部にある地名ももはや登場しない。結局、アントヴェルペンとはじかに関係しない地名がことごとく削除されてしまい、物語の舞台がより小さな領域に限定されてしまった感がある。

アントヴェルペンから遠く離れた土地もことごとく削除された。たとえば、ライナールトが死刑を逃れるためにでっち上げた嘘に、ライナールトの父親がエルメリック王の財宝を発見して、その黄金で傭兵を雇い、熊のブルーンに王冠を被らせて王権転覆の陰謀を企てたというのがある。傭兵を確保するために、父親はエルベ川からソム川まで国中を巡って、またドイツのテューリンゲンからザクセン一帯まで出かけていったという⁴¹⁾。エルベ川はドイツ北部を流れる川で、他方ソム川はフランス北部を流れる川である。テューリンゲンもザクセンもドイツ中部にある地方である。そして、ライナールトが父親の財宝を発見してそれを別の所に移しかえたので、王権転覆の陰謀は沙汰済みになったという⁴²⁾。『狐ライナールト』では以下に見るように、そもそも地名はまったく登場しない。

「ブルーンとイセグリムは手紙を全国津々浦々に送り、給料を稼ぎたい者がいるなら、熊のブルーンのもとに馳せ参じるよう、三、四ヶ月分の給料を前渡しすると各地に伝えました。彼らはこのようにその任務を担う傭兵を多数集めました。しかし結局、先に言ったように、わたしの父親が兵士たちに支払いをしようと財宝の所へ行ったとき、悲しみに胸が張り裂けんばかりでした。そこには一銭も見つからず、わたしが大部分を運び去った後だったからです。それで父親は、わたしにとって将来にわたって長く汚名となる行為に出ました。首を吊ったのです。」⁴³⁾

両者を比較すると、エルベ川からソム川までの地域、またドイツのテューリンゲンからザクセンにかけての一带で父親が傭兵を募ったことがすべて削除されたのが判明する。結果的に『狐ライナールト』では、傭兵を集めるために手紙を送ったものの、財宝が見つからず絶望のあまり父親が首を吊ったと簡潔に述べるにすぎない。

3.2. 脇役陣の消去

ライナールトの一族である雌猿のルーケナウは、王様に心理的圧迫をかける目的で、いかにライナールトとその一族が宮廷にとって有用であるのかを切々と訴え、自分の子供たちを紹介する。ライナールトのために命や財産を投げ打つと断言するルーケナウの子供は、強靱で勇気があり、逞しい息子のビテルスおよびファイルロンプ、娘のハーテネーテの三人である⁴⁴⁾。『狐ライナールト』を見ると、もはや雌猿ルーケナウは固有名としては登場せず、たんにオナガザルになっているのに加えて、三人の子供たちはまったく登場しない⁴⁵⁾。

また、ルーケナウが一族を紹介するつもりで側に来させた動物の名が『狐ライナールト物語』では多数挙がっている。

「すぐになんかの動物がそばに集まってきた。最初は穴熊で、妻のスローペカーデ夫人もいっしょであった。リスとイタチ、ムナジロテンとテン、海狸とその妻オルデガーレ、じゃこう猫とスキタイタチ、毛長イタチとフェレット。この最後の二匹も鶏を好んで食べるから、ライナールトとは

一親等の間柄であった。カワウソも忘れるわけにはいかない。その妻パンテクロテーも。しかし彼らは海狸とともに、これまでライナールトの敵であった。ただ、ルーケナウ夫人がよほど怖かったのであえて反抗しなかったのである。彼女はまた一族の首領であって、助言に優れ、たいへん畏れられていた。彼女の意向によってライナールトのもとに集まった動物は二十匹以上。アトロテー夫人と同様、彼女の二人の姉妹であるクワンテとスリーヴェたちもやってきた。イイズナやおこじょ、ハリネズミ、コウモリもいた。ビテルスとその叔母のアトロテーが彼らを大歓迎した。彼らの遊び仲間であったから。水ネズミやオオバン、フェレット種、オオヤマネコやそれ以外にも四十匹あまりの動物が、全員の名前は挙げられないが、みなライナールトのもとに参集した。」⁴⁶⁾

それに対して『狐ライナールト』では、この部分が大幅に削除されて「即座に穴熊とその妻、小リス、テン、小型のイタチ、そのほか数え切れないほどの動物がやってきた。」⁴⁷⁾と変更され、きわめて簡潔な構成をとっているのがわかる。

3.3. 語り手による語りの削除

地名や脇役陣がほとんど削除されたので、『狐ライナールト』には生起した出来事だけが淡々と時系列的に流れていくような印象を受ける。そうした印象を強めているのは、語り手の語りの部分が削除されたからでもある。熊のブルーが二つに割った樫の木に頭を挟まれ、どんな技を使っても力任せにやっても木から頭を引き抜けなかった場面で、語り手は「いまや、ここでブルーが屈強で大胆であることが、なんの役に立つのだろうか。なんの助けにもならない。」とその場面を説明する⁴⁸⁾。あるいはライナールトを召喚するために第二の使者として雄猫のティベールトがやって来たときに、ライナールトが「ティベールト、わが親愛なる甥よ、本当によく来た。本当にお主のためにあらゆる幸運を願うぞ。」と歓迎するものの、語り手はすぐに続けて「ライナールトにとって口の上手さは何の害になるだろうか。彼が美辞麗句を語るにしても、心では少しもそう思っていない。二人が別れる前にそれがなお明らかになるだろう。」と補足する⁴⁹⁾。以上の説明は『狐ライナールト』ではすべて削除された。さらに、ライナールトが王様暗殺の陰謀をでっち上げて、熊のブルーや狼のイセグリムを破滅させることを目論んだときに、まず自分の身内であるグリムバルトを暗殺の首謀者の一人として告発する。その時の様子を語り手は「さて、ライナールトがどうはじめたかをお聞きあれ。最初に彼が訴えたのは、自分の身内で、苦しい時でもいつも心から彼を慕っていた愛しい一族のグリムバルトであった。そうしたのは、自分の発言をより信じてもらうため、さらにこの事件の責任をより巧みに敵にも負わせるためである。まずこのように発端を開いてから彼は話し出した。」と説明する⁵⁰⁾。他方『狐ライナールト』では、語り手の話としてではなく、「ライナールトは自らの一件をいっそう信用してもらうため、父親や甥についてこのように語り出した。」と、話した主体がライナールト本人に変更された⁵¹⁾。

3.4. 社会批判の削除

ライナールトは物語の後半において、再度穴熊のグリムバルトとともに宮廷へ向かい、道中で熊のブルーと狼イセグリムに行ったことを懺悔する。まず、ライナールトが懺悔したのは、イセグリムが牝馬から受けた手酷い仕打ちであった。子馬を譲ってくれというイセグリムの願いに対して、牝馬が真新しい蹄鉄の付いたうしろ足で狼の額を蹴り上げたという話である。この牝馬と子馬の話

は『狐ライナールト』にも登場するものの、それに続くいわゆるライナールトの神秘主義と称される箇所と、嘘をつくことの重要性を述べた箇所はことごとく省略された。説明の都合上、嘘をつくことの重要性をまず考察したい。

嘘をつくことの重要性に関しては、ライナールトが甥のグリムバルトに語ったつぎの発言が示す通りである。「甥よ、そんなわけで時と場合に応じて嘘と真実を使い分けねばならぬ。へつらい、脅し、哀願、罵倒、それに各人の一番の弱みにまでつけこむ。じつに見事に嘘をでっち上げ、布に巻いて真実らしく思わせるほど嘘を包み隠しておける者以外、この時代に世の中を操ろうとする者に免許授与というわけにはいかぬ。言葉に詰まらず、聞いてもらえるほどに、繊細に嘘を紡ぎ出せる者は、甥よ、この者は奇跡も企てられるのじゃ。教会法と世俗法の学位服と緋服を着られるじゃろうて。戦いとなれば勝利じゃ、それもナイフや剣を抜かずにじゃ。」と⁵²⁾。この場合、動物世界の話ではなく、人間世界の世俗の生々しい実情を暴露している箇所であるので、省略されたと考えるべきであろう。ライナールトによる社会批判がほとんど削除されてしまった例は他にもある。

『狐ライナールト物語』の後半では、ライナールトは前半と同じく罪を逃れようとしてまたも嘘をでっち上げる。前半では財宝の話であったのに対して、後半では指輪と櫛と鏡という三つの財宝の話だという。王様とお后様は前回と同じく、欲に目が眩んで騙されてしまう。ライナールトが財宝について延々と話しながらいくつもの挿話を織り込み、挿話を援用しながら社会悪や個々人のエゴを批判している。それは、自分以外の宮廷員がみな悪党にほかならず、自分とその一族が宮廷にとって有益な存在であるというイメージを宮廷に集まっている一同に植えつけるためである。本論では端的な例として、「善行をしなかった狼の話」とライナールトの父親が病気の獅子王を治療したという獅子王の治療の話を取り上げたい⁵³⁾。

善行をしなかった狼の話は、『イソップ寓話集』の第一五六話「狼と鷲^{さぎ}」にもととの話がある。喉に引っ掛かった骨を取ってやった鶴に、狼が何のお礼もしなかったという話である。『狐ライナールト物語』の挿話の末尾には「このように、悪党たちは自分に奉仕してくれた者に報いるのです。悪党を成り上がらせる所では、名誉とあらゆる法は地に墮ちます。他人の弱みにつけこもうとする者も少なくなく、大勢いるのです。しかし我が身の隅から隅まで潔白かを調べてみると、自分たちがつけこもうとする者よりもむしろ自分自身に見つかるものです。だから人が言っています、本当のことです。非難したい者は、みずから潔白であるべきだと。」とある⁵⁴⁾。後半はライナールトが処罰を逃れるために発言したと考えられよう。前半は悪党たちの日常の振る舞いを非難したものである。『狐ライナールト』になると、「可哀想な鶴は、その奉仕と仕事の見返りにほかに何も貰いませんでした。」とだけあり、人間世界に跋扈する悪党の話は削除された⁵⁵⁾。

獅子王の治療の話では、病気から全快した王様がライナールトの父親にふかく感謝して、国中に父親をライナールト師と呼ぶように命じさせた所で話が終わる。そこから『狐ライナールト物語』では、貪欲な悪党が羽振りを利かせて、知恵が抑圧され、欲張りな連中が宮廷の殿方のなかに何と多いことか、といった宮廷や社会に対する批判が延々と続いている⁵⁶⁾。これが『狐ライナールト』には全く記述されておらず、国中にライナールト師と呼ばせたとあるのみとなった⁵⁷⁾。批判に晒されることを恐れて『狐ライナールト』では、人間世界の実情はできるだけ物語から外して、人間ができるだけ前面に出てこない舞台設定に意図的に変更されたという印象をもたざるを得ない。

3.5. 教会批判の削除

前述したライナールトの神秘主義というのは、中世の神秘主義思想である自由霊運動の主導者マルゲリット・ポレットの思想を援用して、ライナールトが自己弁護を試みた箇所を指す。ポレットは1250年ごろフランス北部にあるヴァランシエンヌに生まれ、1310年にパリで異端のかどで火あぶりに処された⁵⁸⁾。後述するように、『狐ライナールト』が印刷された十六世紀中頃はカトリック対プロテスタントの宗教対立が激化した時代であり、こうした異端の思想をそのまま文中に残すのは危険だと考えられたのは当然であろう。

人間の司祭や教会関係者がストーリーのなかに描かれている場合もある。もともと一連の狐の物語においては、世俗的で貪欲、性的に放縦な司祭がやり玉に挙げられ、批判や嘲笑の対象になっていた。その中でもとくに『狐ライナールト物語』の前半から①第一の使者である熊のブルーが蜂蜜の話に騙されて村人から手酷い仕打ちを受けた場面、②同じく第二の使者である雄猫のティベールトが村人から手酷い仕打ちを受けた場面、③ライナールトの懺悔の中で登場するヴェルマンドワの司祭の振る舞い、④ローマの教皇庁にいるとされる猿メルテンの親戚について考察し、どのような変更が生じているのかを論じたい。

①第一の使者である熊のブルーがライナールトを迎えに行くと、ライナールトは蜂蜜を食べすぎてとても宮廷には行けないと言う。ブルーは蜂蜜を腹一杯食べたいので、狐といっしょに大工のラントフェルトの屋敷に行った。ライナールトは楔を打ち込んで縦に割った樫の木の中に大量の蜂蜜があると吹き込んだので、ブルーは頭を両耳をそろえて木の中に突っ込んだ。ライナールトは素早く走り寄って、樫の木から楔を引き抜くと熊は木の中に挟まってしまった。

『狐ライナールト物語』

「そこへラントフェルトがやって来て熊が捕まっているのがわかると、隣人のいる所へ急いで突っ走って、『みんな来てくれ、屋敷で熊が捕れた。』と告げた。この知らせは村中に広まった。村に残る男女はだれ一人おらず、誰もができる限り早くやってきて、各自が武器を携行していた。ある者はスコップを、ある者は三つ叉を、またある者は箒、ある者は垣根用の杭をもち、また殻竿をもつ者もいた。教会の司祭は十字架をもっていた。雑用係は旗竿をもってきた。司祭の妻ユーロッケは糸紡ぎをしていたときの糸巻き棒をもってきた。年のせいで顔面に歯さえない老女たちも走ってきた。いまやブルーには度重なる辱めが目前に迫っていた。」⁵⁹⁾

『狐ライナールト』

「その間ブルーは後ろ足で大騒ぎしていると、ラントフレイトが聞きつけて急いで外に出てきて何が屋敷に潜んでいるか確かめようとした。そして熊が捕まっているのがわかると、近所の住人全員に告げに行き、みなは急いで走ってきて、ある者は棒を、ある者は熊手をもち、また殻竿をもつ者もいた。さらに老女たちも糸巻き棒をもって走ってきて、熊がどこに身を隠したらよいのかわからないほど迫ってきた。」⁶⁰⁾

屋敷で熊が捕れたのに気づいたラントフェルトが、村人総出で現場に駆け付けてきた場面である。村人といっても、具体的に名指しされている者はわずかで、両作品ともスコップや三つ叉、箒ある

いは棒や熊手、殻竿をもってきた者がいたという記述に留まっている。また、老女たちも走ってきたという記述も共通している。ところが、『狐ライナールト物語』で詳しく説明されている教会の関係者、すなわち十字架をもってきた司祭と旗竿をもってきた雑用係、さらに糸巻き棒をもってきた司祭の妻ユーロッケという人物は、ことごとく『狐ライナールト』では削除された。司祭の妻ユーロッケがもってきた糸巻きが、今度は老女たちの持ち物に変えられていることから、意図的な削除が明らかである。

②二番手として雄猫のティバールトが、狐を連れてくる役目を果たそうとする。ティバールトがライナールトのもとにやってくると、ライナールトはもう暗いから次の朝早く出かけようとする。ティバールトにとって、夕食に与えられるなら、次の朝に出発するのはなんら問題ではなかった。司祭の納屋に、猫の大好物である鼠がたくさんいるという。彼らはいっしょに納屋へ行くことに決め、ライナールトはまず猫をなかへ潜らせる。というのも、ライナールトは、納屋の穴の開いたところの後ろに司祭の息子メルティネが罌を仕掛けているのを知っていたからである。ティバールトは罌に嵌って大声を上げたので、家中の者が起き出して猫をさんざん痛めつけた。殺されると思ったティバールトは司祭の股間に飛びかかり、右の玉を掻きむしった。

『狐ライナールト物語』

「恨み骨髓のメルティネは殴ってティバールトの目を一つ奪い取った。素っ裸の司祭は手を振り上げて大きな一撃を加えようとする、ティバールトはきっと死ぬかと思って勇気を出して、爪と歯をつかって司祭の股間に飛びつき、右の玉を掻きむしったのである。飛びかかれて司祭は災難と赤っ恥であった。

例の物^{ぶつ}は床に落ちて、これを見たユーロッケ夫人が自分の父親の魂にかけてがさつに誓って言うには、『司祭にこんなことが、こんな赤っ恥と汚名と麻痺が起こらないのなら、募金まる一年分のお金をかけてもいいのに。』と。また『そもそも罌は悪魔の名のもとにここに仕掛けられたにちがいない。見なさい、メルティネ、愛しい息子よ、これがあんたの父親のあそこの部分の片割れです。なんという屈辱とわたしの大損害。傷から癒えてもわたしの役には立たず、永久に甘美な遊びをするには不能のままでしょう。』ライナールトは外の穴の前で話を全部聞いていた。立ってられないほど笑い転げて、嘲笑して言った。『ユーロッケ夫人よ、もうお静かに。大袈裟に嘆くのを止めよ。お前の主人が玉一つなくしたところで、奴が新たに背後から尽くすならば、なんの害もないぞ。それでも奴はすごく楽しませてくれるはずじゃ。鐘一つで音を鳴らす礼拝堂は世の中にいくらでもある。』ライナールトはユーロッケ夫人をこう嘲笑しつつ叱責した。彼女が深く苦悩していたからである。司祭はもう立ってられず失神して倒れ、彼らは司祭をふたたび持ち上げて寝床につかせた。ライナールトはふたたび根城に帰ってしまい、危機に瀕していたティバールトを置き去りにした。」⁶¹⁾

『狐ライナールト』

「夫人は激怒しており、殴ってティバールトの目を一つ頭部から奪い取った。誰の手中に落ちたのかを察したティバールトは、親父の首に飛びかかり、顔面から鼻を噛みちぎった。親父は苦痛のあまり失神して地面に倒れ、夫人は叫んで『わたしの雄鶏全部かけてもいいから、ティバールトがあんたをこんな不細工にしなければよかったのに。悪魔があんたに、わたし思うけど、ライナールトを

捕まえるために罾を仕掛けるよう仕向けたんだわ。あいつはティバールトを騙してこの穴に送り込みながら、外にいるわ。』と。ライナールトは外の穴の前において話を全部聞きながら、笑わずにはいられず嘲笑して言った。『口を嚙め、ご夫人よ。お前の主人に鼻がないなら、お前が後門⁶²⁾を広げたときにそれを嗅ぐこともなかろう。』彼はこう言うとふたたび根城に帰ってしまい、危機に瀕していたティバールトを置き去りにした。』⁶³⁾

『狐ライナールト物語』の全体を通じておそらく最も卑猥な場面であろう。その主役は司祭であり、同時にその夫人のユーロッケ、息子のメルティネである。司祭が右の玉を失うことになったのは、司祭が妻帯して子供までいるという状況への罰と見なせるだろう⁶⁴⁾。『狐ライナールト』では司祭がすべて親父に変えられ、ティバールトの目を一つ頭部から奪い取ったのは夫人であって、息子のメルティネではない。そもそも『狐ライナールト』では息子は登場しない。また、ティバールトが噛みちぎったのは右の玉ではなく、鼻である。したがって、ユーロッケ夫人が『狐ライナールト物語』で「そもそも罾は悪魔の名のもとにここに仕掛けられたにちがいない。見なさい、メルティネ、愛しい息子よ、これがあんたの父親のあそこの部分の片割れです。なんという屈辱とわたしの大損害。傷から癒えてもわたしの役には立たず、永久に甘美な遊びをするには不能のままでしょう。」と性的な楽しみができなくなったことを嘆く必要は『狐ライナールト』ではなくなり、顔が不細工になったという発言に変更された。それに対するライナールトの嘲笑は「口を嚙め、ご夫人よ。お前の主人に鼻がないなら、お前が後門⁶⁵⁾を広げたときにそれを嗅ぐこともなかろう。」というもので、卑猥ではなくなったとはいえ、野卑にはちがいない⁶⁶⁾。重要なのは、『狐ライナールト』のこの場面から司祭の文言がことごとく削除され、まったく教会とは無関係の場面と化したことである。

③同じことは、ライナールトの懺悔の中で登場する貪欲で無慈悲なヴェルマンドワの司祭についても言える。『狐ライナールト』になると司祭の話ではなくなり、すべて「家の主人」の話へと変更されている。

④ローマの法皇庁にいるとされる猿メルテンの親類は、『狐ライナールト物語』によると、聖職売買を意味する叔父のシモンとプラントゥ[独り占め]やライスターフェーレ[地獄耳]、スカルクフォント[わる知恵]、ヒフミー[よこせ]、グレープフォレ[つかみ取り]であった。『狐ライナールト』ではこうした強欲な教会関係者は削除されると予想されるものの、名前を変えただけでやはり登場している。シモン殿のほか、知り合いにはグレイペトアル[総取り]やライステルトナウエ[袋耳]、ゲーデインヴェンシー[でっち上げ]がいるとされる。ところが、彼らが活躍するのはもはやローマの法皇庁ではなく、宮廷においてである。この場合も、巧妙に教会に関係する人物が宮廷の関係者に変更されている⁶⁷⁾。

4. 『狐ライナールト』と新教対旧教の対立

以上の①から④まで考察した通り、『狐ライナールト』ではカトリック教会に配慮して、もはや人間の司祭は一人も登場しない。動物が司祭(pape)あるいは聴罪司祭(biechtvader)、助任司祭

(capelaen)として描かれている例も七例に過ぎず、キリスト教に関連する人物ないし動物は大幅に削除された⁶⁸⁾。こうした教会への配慮は、1564年当時激しさを増していたカトリック対プロテスタントの対立を背景にして考えるべきであろう。たしかにアルバ公によって、印刷業者のクリストフ・プランティンが1566年に出版した『狐ライナールト』が発禁処分を受けたのは1569年のことであったものの、プロテスタント的な書籍に対する検閲はすでに1520年から始まっていたとされる⁶⁹⁾。1520年6月15日に教皇レオ10世は、『エクスルゲ・ドミネ』をという勅書を公布して、ルターの説を非難して「著作を発禁処分にし、60日以内に謬説を撤回するようにルターに命じ、さらに従わなければ破門されるとうたっている。」⁷⁰⁾それゆえ「教皇の破門脅迫勅書」とも称される⁷¹⁾。勅書には、異端とされる人物の書籍を読んだり入手したり、それらの公示、称賛、印刷、刊行、擁護することに対する禁止規定が盛り込まれ、これ以後書籍の検閲はますます厳格になったという⁷²⁾。他方アントヴェルペンは、16世紀の20年代および30年代に、プロテスタント系書籍の発行および輸出に関して重要な都市に発展したという。ルーヴァン大学の神学者たちが1546年および1550年、1558年に制定した発禁図書のリストなかで、アントヴェルペンで印刷された図書の比率が非常に高かったという⁷³⁾。

こうした16世紀中葉のアントヴェルペンにおける出版状況を考慮すれば、『狐ライナールト』においてカトリック教会への一定の配慮がなされ、それ以前の狐の叙事詩のなかで批判や嘲笑の対象とされてきた人間の司祭がもはや登場しないことも容易に理解されるだろう。当時ますます厳格になった出版物への取り締まりから逃れるために、大幅な手直しが施されたのだと判断できる。

ここでシヴィリテタイプの書体に関して、前章において意図的に記述しなかった特徴を取り上げたい。シヴィリテタイプの書体を設計したグラニョンが、どの分野に自分の活字が採用されるのを見込んだか、つまりどんな集団を重要だと考えていたのかを見ると、それは神学者や人文主義者の集団ではなく、むしろ貴族や発展した市民層、若い詩人たちや児童たちで、要するに主としてフランス語で読み書きをする人々であった⁷⁴⁾。その中で持続的な成功を収めたのは、児童用の学校教材に使用されたケースであったという。そうした学校教材として制作された小冊子がいずれもプロテスタント的であったという指摘は興味深い⁷⁵⁾。この事情はオランダでも同様であった。前述した1558年にプランティンが出版した『児童のためのABCあるいはキリスト教教育』は、読み書きの教本とキリスト教教育が一体化した小冊子で、作者はFrère Jean Pierre de Ravillanとなっているものの、この人物はおそらくオランダにおいて熱心なカルバン主義者となったジャン・タファン Jean Taffin だろうという⁷⁶⁾。

こうしたプロテスタントの小冊子が、前述したようなカトリック側の検閲をすり抜けて広まったのは、作者が偽名を使用したからだけではない。小冊子は、改革派の主張を喧伝するものではなかった。そうではなく、語ることによってではなく語らないことで改革派の主張を小冊子の中に潜り込ませる種類のものであったという⁷⁷⁾。すなわちミサないし司祭職、それ以外のカトリック特有の主題については一言も言及しないという消極的な本作りをする一方で、その中に名前を伏せてルターやその他著名な新教徒の文言を滑り込ませるといった巧妙な作戦に出たのである。したがって、その反カトリック的な主張はすぐには認識されず、当初はカトリック側から出版の承認を得ながら、その後発禁になる書物も何度かあったとされる⁷⁸⁾。これが、カトリック側の検閲を逃れながら、プロテスタントの教義を広めるための方法であった。一見すると無害の子供向け小冊子が、じつはプロテスタント派が学校に潜り込ませた宣伝媒体であった。しかもシヴィリテタイプの書体は当時の手

跡に似せて設計された活字で、ローマン体やゴシック体よりも読み易かったので、学校における布教活動にはそれだけ効果的であったと言えよう⁷⁹⁾。

当時のアントヴェルペンにおけるカトリック側の検閲およびそれに対抗するプロテスタント側の巧妙な本作りという観点からいま一度『狐ライナールト』を考察すると、それをプロテスタントの色合いが濃い作品であると結論したい気にさせられる。そう考えると、前述した検閲を逃れるためのカトリック教会への一定の配慮、すなわち全編を通じて人間の司祭を除外したという事実は、じつはそれがプロテスタント派が自らの教義を広めるために採用した巧妙な作戦だとも見なせるのである。小さな子供たちをプロテスタント思想に感化させるために、一見無害の小冊子を読みやすいシヴィリテタイプで提供したのであった。

シヴィリテタイプが学校向けの教材に使用されたように、『狐ライナールト』も教材であった可能性が高い。その序の末尾に「また、楽しみながら学ぶ以上に上手に学べることはないでしょうから、わたしたちは喜んで本書に取りかかり、これを低地ドイツ語⁸⁰⁾で印刷してもらいました。こうした称賛すべき著者たちに喜びを見いだす方々に満足していただけるようにと。」とあり、学ぶことを目的として出版されたのが明白だからである⁸¹⁾。さらに、1566年に今度はプランティン自身が印刷して出版した蘭語仏語対照の『狐ライナールト』の序には、フランス語教材として出版されたことが明記されている⁸²⁾。

他方、『狐ライナールト』にはルターやその他の改革派の主張は直接盛り込まれていない。しかしながら、かなり早くから指摘されてきた怪しい一文が序に記されている⁸³⁾。序には、登場する動物名のなかに、人間のさまざまな階級が含意されているという一文があり、その第一に聖職者の階級が穴熊に喩えられている。ところが、それに続く文言は「そして密かに彼らの貪欲さと邪淫が攻撃されています。」というものである⁸⁴⁾。たしかに穴熊が物語ではライナールトのために聴罪司祭となって登場するものの、貪欲でもなく邪淫を犯すわけでもない。したがって批判されているのは人間の聖職者の階級ということになる。とすれば、この一文は意図的に序に残されたもので、しかも聖職者の階級が「穴熊に喩えられている」と穴熊を引用してあたかも動物世界の出来事であるかのように偽装しているとも見なせるだろう。明らかにカトリック側の検閲を逃れるための偽装である。1564年版の『狐ライナールト』が発禁処分を受けず、1566年にプランティンが出版したほぼ同一の『狐ライナールト』が発禁処分を受けたことを考慮すると、このケールベルヘン版の『狐ライナールト』はひとまず検閲を素通りしたようである。ただ、ケールベルヘン自身はその後1569年に他の四人の印刷業者また書籍販売業者らとともに発禁とされた書籍を保有していたという罪でアルバ公によって逮捕された⁸⁵⁾。

5. 結論

以上、前述した様々な改編によって、『狐ライナールト』では物語の舞台がアントヴェルペンを中心に展開し、『狐ライナールト物語』になお脇役として登場していた動物たちや人間が削除され、物語がライナールトを主人公とした出来事の連鎖として手直しされた。メインストーリーとはさほど関係しないサブストーリーがことごとく削除され、事件が時系列に沿ってあっさり経過していく印象が強い。

他方、民衆本『狐ライナールト』の内容および使用された書体の考察を通じて、さらに当時のアントヴェルペンの置かれた新教対旧教の対立を背景として、その性格が明らかになった。『狐ライナールト』に見られる、とりわけ司祭を巡る内容の変更などを検討すると、この民衆本はプロテスタント派の教義を浸透させるために印刷された可能性が高い。『狐ライナールト』の表題に記された「とても楽しくて気晴らしになる物語」には、プロテスタント思想の浸透という隠された意図が見え隠れするのである。

注

- 1) 1500年までにわずか七つの散文小説が日の目を見たという。すなわち『ローマ七賢人物語』1479年7月25日、『狐ライナールト物語』1479年8月17日、『パリスとヴィエンナ』1487年5月19日、『4人のアイミーンの子供たち』1490年頃、『メリュージュ』1491年2月9日、『ティロのアポロニウス』1493年9月23日、『グリセルデイス』1500年頃(1495年の旧版は散逸した)。Debaene 1951(1977):pp.302参照。
- 2) Goossens 1983:XIIIの計算による。「およそ」としたのは、計算の元になった『ライナールト物語』にはない行が2行含まれているからである(Goossens 1983:LXXVI注12参照)。具体的に残っている部分は、まず散文による教訓につづいて『ライナールト物語』の一五一三行～一五二八行、一五三三行～一五八八行、木版画、一六三八行～一六五五行、散文による章の標題(二一章)、同じ木版画が二葉、一七五三行～一七七二行、散文による章の標題(二二章)、一七八〇行～一八二八行、散文による章の標題(二三章)、木版画、散文二行、一八二九行～一八九〇行、散文による章の標題(二四章)である(Goossens 1983:XIII また『狐の叙事詩』p.501参照)。
- 3) 『狐ラインケ』の詳細は以下の通り。リューベックのケシ花印刷所(Mohnkopfdruckerei)による。一四九八年成立、二四二頁からなる。ドイツのヴォルフエンビュッテル、アウグスト公図書館蔵(32.14 Poet. rarissimum)。ブレーメン市立・大学図書館蔵(II b. 34、欠落あり)、ベルリン、国立図書館プロイセン文化財収蔵館蔵(Inc. 1478、欠落あり)。『狐の叙事詩』p.501-502参照。
- 4) この時代に印刷され刊行された書籍がすべて民衆用とは限らないという理由で、「民衆本」と呼ぶのに反対する意見もある(Verzandvoort/Wackers 1988:12-13)。
- 5) 16世紀当時、アントヴェルペンにあった出版業者や書籍販売業者が居住していた一区画。
- 6) 原文は以下の通り。縦線|は改行を表す。すべての行が、本文の日本語訳にあるとおり中央揃えになっている。Rijns 2006:XXIV参照。ただし、Rijns 2006:XXIVにあるイタリック体での表記に対して、原文は立体(ローマン体)であるので原文にしたがった。書体を変えて(Lucida handwritingを使用した)、ローマン体とシヴィリテタイプとを区別した。REYNAERT DE VOS,/EEN SEER GHENVECHLIIC-/KE ENDE VERMAKELIICKE/Historie, met haer Morali-/satie ende corte wtleg-/ghinghen. Men vintse te coope Tantwerpen, by Peeter van keerberghen, woonende op onser Vrouwen/kerkhof int gulden Cruys. また巻末の原文は次の通りである。Gheprint Tantwerpen int Iaer ons/Heeren. 1 5 6 4. スラッシュは改行を表す。以下同じである。
- 7) Vermeulen 1986:194-264を参照されたい。とくに謳い文句としての「楽しさ」とその思想的背景については194-209参照。さらに「…『短い』および『真実の』というのは、真実そして楽しさを提供するために努力しているという一体的なイメージを反映している。」という指摘も興味深い(Vermeulen 1986:194)。
- 8) 藤代幸一訳『狐ラインケ』1985:4。
- 9) 藤代幸一訳『狐ラインケ』1985:96-97。
- 10) 『狐ライナールト』第17章(Rijns 2006:88)。
- 11) 『狐ライナールト』第35章(Rijns 2006:148)。
- 12) たとえばVerjaring 1973に記載されていない。
- 13) Voet 1982:V:1991-1992による。指摘はVerzandvoort 1988:239による。Willems 1911:204も参照されたい。
- 14) フローリンは当時の通貨単位の名称で、かつてのオランダの通貨グルデンもこう呼ばれていた。スター

- リングはその下部通貨で、帳簿に記載された通貨関係では（37と2分の1連（ream）＝37fl.10st.）なので、20スターリングで1フローリンとなるようである（Voet 1982:V:1992）。
- 15) Voet 1982:V:1992.
 - 16) たとえば Willems は、1550 年頃に初版が成立したと考えている（Willems 1911:209）。また、挿絵の系譜を手掛かりとして 1564 年以前に『狐ライナールト』の初版ないし異本が存在したとする説もある（Verzandvoort/Wackers 1988:13）。
 - 17) Carter/Vervliet 1966:3-5.
 - 18) Carter/Vervliet 1966:5.
 - 19) Carter/Vervliet 1966:10.
 - 20) Carter/Vervliet 1966:33, 91. 原題はつぎの通り。*L'ABC ou instruction chrestienne pour les petits enfants. Reveue par vénérables docteurs en théologie. Avec l'instruction chrestienne de F. J. Pierre de Ravillan.*
 - 21) 『狐ラインケ』の第一の序文にあるロートリンゲン大公の師父ヒンレク・ファン・アルクメルがじつは『狐ラインケ』の作者ではなく、それに先行するケンブリッジ断片の編者であるとされる。『狐ラインケ』の作者は逆に言えば、ケンブリッジ断片の序をそのまま流用しているとも言える（藤代幸一訳『狐ラインケ』1985:3-7 参照）。
 - 22) 藤代幸一訳『狐ラインケ』1985:313.
 - 23) 序の相互比較は後章を参照されたい。
 - 24) Prien 1882:16.
 - 25) Rijns 2006:100.
 - 26) 藤代幸一訳『狐ラインケ』1985:95.
 - 27) Breul 1927:49.
 - 28) Prien 1882:10.
 - 29) Rijns 2006:88.
 - 30) Prien 1882:42-44
 - 31) 藤代幸一訳『狐ラインケ』1985:27.
 - 32) Lübben 1867:13.Prien 1882:43 では、途中の文が省略されているので、Prien も引用している Lübben から当該箇所を引用した。
 - 33) Rijns 2006:36.
 - 34) 藤代訳は意識してある。直訳すれば「彼らが快感を得て悪いことをしたい気になる度に」となり、いっそう『狐ライナールト』の内容に近づく。
 - 35) 『狐ライナールト物語』の総文字数は 119833 文字であるのに対して『狐ライナールト』のそれは 62652 文字である。比率にすると 52,28276% となり、およそ 52% である。
 - 36) 『狐の叙事詩』 p.212.
 - 37) 『狐ライナールト』4 章（Rijns 2006:32）。また Willems 1911:206 参照。
 - 38) 『狐の叙事詩』 p.218.
 - 39) 『狐ライナールト』9 章（Rijns 2006:48）。また Willems 1911:206-208 を参照されたい。
 - 40) 10 の地名は、アルデンヌ、アントヴェルペン、ギリシア、トロイア、バンデロー、フランドル、ポルトガル、ローマ、クワートベスティーア、アレガルベである。『狐ライナールト物語』に記載がある 37 の地名には、ライナールトが財宝を隠した場所である架空の地名クリーケンブットも算入した。すなわちアーケン、アヴィニョン、アラビア、アルデンヌ、インド、ヴェルマンドワ、エナム、エルヴァーディンク、エルベ川、エルフルト、エルマーレ、カメリク、ギリシア、クリーケンブット、ケルン、ザクセン、ソム川、ツイリクスゼー、テューリンゲン、トリア、トロイア、ドロングン、パウデロー、パリ、ハルレベーク、フッケンブローク、フランドル、フルステルロー、フロールスベルゲン、ハイフテ、ヘント、ホラント、ポルトガル、ハウトホルスト、モンペリエ、ヨルダン川、ローマの 37 である。
 - 41) 『狐の叙事詩』 p254.
 - 42) 『狐の叙事詩』 p254-255.

- 43) 『狐ライナールト』 28 章 (Rijns 2006:122, 124)。
- 44) 『狐の叙事詩』 p.306-307.
- 45) 『狐ライナールト』 52 章 (Rijns 2006:214, 216, 218, 220, 222, 224, 226, 228, 230, 232, 234)。
- 46) 『狐の叙事詩』 p.308. 数の多いことを示すためにこのように列挙するのが中世の手法だという (Wackers 2002:371)。また、ブルーンの命を狙って駆け足でやってきた村人の名前なども大幅に削除されている (『狐の叙事詩』 p.221-222 参照)。
- 47) 『狐ライナールト』 52 章 (Rijns 2006:230)。
- 48) 『狐の叙事詩』 p.220.
- 49) 『狐の叙事詩』 p.226-227.
- 50) 『狐の叙事詩』 p.250.
- 51) 『狐ライナールト』 28 章 (Rijns 2006:114)。
- 52) 『狐の叙事詩』 p.288.
- 53) その他「馬と鹿の話」また「驢馬と犬の話」、「ライナールトの父親と雄猫ティベールトの話」「豚の分配の話」も同様である。『狐の叙事詩』 p.316-325 参照。
- 54) 『狐の叙事詩』 p.320.
- 55) 『狐ライナールト』 59 章 (Rijns 2006:262)。
- 56) 『狐の叙事詩』 p.323.
- 57) 『狐ライナールト』 60 章 (Rijns 2006:268)。
- 58) Wackers 1997:169-180 とくに 172-175 参照。また Wackers 2002、Gnädingen 1987 を参照されたい。
- 59) 『狐の叙事詩』 p.220-221.
- 60) 『狐ライナールト』 10 章 (Rijns 2006:54)。
- 61) 『狐の叙事詩』 p.230-231.
- 62) 原文でも *achter poorte* すなわち「後ろの門」で、「肛門」のこと。
- 63) 『狐ライナールト』 14 章 (Rijns 2006:74, 76)。
- 64) Wackers 2002:368.
- 65) 原文でも *achter poorte* すなわち「後ろの門」で、「肛門」のこと。
- 66) Martin 1874:XXV.
- 67) Goossens 1998:51 の指摘による。
- 68) 七例とは以下の通りである。ライナールトがキワールトに信経を教えて立派な助任司祭 (Capellaen) にしてやると約束した例 (『狐ライナールト』第 1 章 (Rijns 2006:22))、王様が雄羊のベリーンを祭司 (priester) に任命した例 (『狐ライナールト』第 33 章 (Rijns 2006:140))、ライナールトの聴罪司祭 (biechtvader) であるグリムバールト (『狐ライナールト』第 45 章 (Rijns 2006:192))、ライナールトが聴罪司祭 (biechtvader) から課された苦行を行ったという例 (『狐ライナールト』第 46 章 (Rijns 2006:200))、司祭 (Pape) のマールテン (『狐ライナールト』第 48 章見出し (Rijns 2006:200))、カメリク司教の弁護人である司祭 (Pape) のマールテン (『狐ライナールト』第 48 章 (Rijns 2006:204))、赤い脳天をした助任司祭殿 (heere Capelaen) のイセグリム (『狐ライナールト』第 61 章 (Rijns 2006:274)) である。
- 69) Verzandvoort/Wackers 1988:18.
- 70) 『新カトリック大事典』第 1 巻 768.
- 71) 『ドイツ史 1—先史～1648 年—』1997:431.
- 72) Verzandvoort/Wackers 1988:18.
- 73) Marnef 1992:221.
- 74) Verwey 1961:298. また Verwey 1964:pp.18 を参照されたい。
- 75) Verwey 1961:299. また Verwey 1964:pp.19 も参照されたい。
- 76) Verwey 1964:pp.22. また Verwey 1961:303 も参照されたい。
- 77) Verwey 1961:299. また Verwey 1964:19 も参照されたい。
- 78) Verwey 1961:299.
- 79) Verwey 1961:302.

- 80) 現代のオランダ語のこと。現在の低地ドイツ語（原文では *Nederduytsch*）は、ドイツの北部方言を指して用いられるものの、かつてはオランダ語も含めて広い言語域を指して用いられた呼称であった。
- 81) 指摘は *Verzandvoort* 1988:240 による。
- 82) *Rijns* 2006:14.
- 83) *Willems* 1911:211.
- 84) *Rijns* 2006:12. 原文は以下の通りである。Inden eersten, den gheestelijcken staet wort gheleken byden Dasse. Ende bedectelijck worden dese begrepen van ghiericheyt ende oncuyshyeyt.
- 85) *Marnef* 1992:223.

参考文献

- Breul 1927: Karl Breul, *The Cambridge Reinaert Fragments (Culemann Fragments)*. Cambridge 1927.
- Carter/Vervliet 1966: Harry Carter/H.D.L. Vervliet, *Civilité Types*. Oxford 1966.
- Debaene 1951 (1977): Luc. Debaene, *De Nederlandse Volksboeken. Ontstaan en Geschiedenis van de Nederlandse prozaromans, gedrukt tussen 1475 en 1540*. Onveranderde herdruk van de uitgave Antwerpen, Uitgeverij de Vlijt 1951, Hulst 1977.
- 『ドイツ史1—先史～1648年—』成瀬治・山田欣吾・木村靖二編 1997年 山川出版社
- Gnädingen 1987: Luise Gnädinger, *Margareta Porete Der Spiegel der einfachen Seelen*. Zürich/München 1987.
- Goossens 1983: Jan Goossens, *Reynaerts Historie – Reynke de Vos*. Gegenüberstellung einer Auswahl aus den niederländischen Fassungen und des niederdeutschen Textes von 1498. (Texte zur Forschung 42) Darmstadt 1983.
- Goossens 1998: Jan Goossens, Reynaerts und Reynkes Begegnung mit dem Affen Marten. In: *Reynke, Reynaert und das europäische Tiererepos: Gesammelte Aufsätze / Jan Goossens*. Münster; New York; München; Berlin 1998. *Niederlande-Studien*; Bd.20. p.43-52. 本来は *Niederdeutsches Wort* 20 (1980), p.198-213 に所収。
- 『狐ラインケ』藤代幸一訳 一九八五年 法政大学出版局
- 『狐の叙事詩「ライナルト物語」「狐ライナルト物語』檜枝陽一郎編訳・読解 2012年 言叢社
- Lübber 1867: *Reinke de Vos nach der ältesten Ausgabe (Lübeck 1498) mit Einleitung, Anmerkungen und einem Wörterbuche von August Lübber*. Oldenburg 1867.
- Marnef 1992: Guido Marnef, Repressie en censuur in het Antwerps boekbedrijf 1567-1576. In: *De zeventiende eeuw*, 8 deel 2 (1992) p.221-227.
- Martin 1876: Ernst Martin, *Das niederländische Volksbuch Reynaert de Vos nach der Antwerpener Ausgabe von 1564 abgedruckt mit einem Facsimile des Titels und einer Einleitung*. Paderborn 1876.
- Prien 1882: Friedrich Prien, ZUR VORGESCHICHTE DES REINKE VOS. In: *Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur (PBB)* 8/3 1882, p.1-53.
- Rijns 2006:Hans Rijns, *De gedrukte Nederlandse Reynaerttraditie*. Hilversum 2006.
- 『新カトリック大事典』第1巻 新カトリック大事典編纂委員会 1996年 研究社
- Verjaring 1973:*De vijfhonderste verjaring van de boekdrukkunst in de Nederlanden. Tentoonstelling in de Koninklijke Bibliotheek Albert I. Catalogus* Brussel 1973.
- Vermeulen 1986: Yves G. Vermeulen, *TOT PROFIJT EN GENOEGEN'. Motiveringen voor de produktie van Nederlandstalige gedrukte teksten 1477-1540*. Groningen 1986.
- Verwey 1961: H. de la Fontaine Verwey, Typografische schrijfboeken. Een hoofdstuk uit de geschiedenis van de civilité-letter. In:*De Gulden Passer* 39 (1961) p.288-326.
- Verwey 1964: H. de la Fontaine Verwey, Les caractères de civilité et la propagande religieuse. In:*Bibliothèque d'humanisme et Renaissance. Travaux et documents* 26 (1964) p.7-27.
- Verzandvoort 1988: Erwin Verzandvoort, Over de door Plantijn gedrukte uitgaven van Reynaert de Vos. In:*De gulden passer* 66-67 (1988), 237-252.

- Verzandvoort/Wackers 1988: Erwin Verzandvoort en Paul Wackers (ed.), *Reynaert den Vos oft der Dieren Oordeel. Facsimile van het rond 1700 in de drukkerij van Hieronymus Verdussen vervaardigde volksboek*. Gloriant deel 2. Antwerpen/Apeldoorn 1988.
- Voet 1982: Leon Voet, *The Plantin Press (1555-1589). A Bibliography of the Works printed and published by Christopher Plantin at Antwerp and Leiden*. 6 vols. Amsterdam 1980-1983, volume V 1982.
- Wackers 1997: Paul Wackers, Reynaert as Mystic. Function and Reception of a Passage from *Reynaerts Historie*. In: *Reinardus* 10 (1997) S.169-180.
- Wackers 2002: Paul Wackers, *Reynaert in Tweevoud Deel II Reynaerts Historie*. Amsterdam 2002.
- Willens 1911: Leonard Willems, Reinardiana VI. De datums der beide volksboeken van Reinaert de Vos. In: *Tijdschrift voor Nederlandse Taal- en Letterkunde (TNTL)* 30 (1911) 204-216.

(本学文学部教授)